

(株)テレビ静岡相談役 曾根正弘氏に聞く (1)

曾根正弘 (そね まさひろ)
(株)テレビ静岡 相談役
(聞き手：普及誌編集委員)

(株)テレビ静岡相談役 曾根氏のインタビューの第1回です。特派員として海外45カ国での取材活動を経て、テレビ静岡の経営者として早くからインターネットやクロスメディアに着目される等、長年テレビ業界で活躍されてきた曾根氏に、放送、情報、地域、国際といった幅広い視点からお話を伺いました。今回は、テレビ業界に入られた経緯、コンピュータを学ばれた米国留学、モスクワ特派員への道程、国際人の育成などについて伺いました。

目次

1. 実験心理学からフジテレビへ
2. MITでコンピュータ・サイエンス
3. 技術から報道へ
4. モスクワ特派員生活
5. 国際人を育てるには
6. 海外経験で得たこと

次回以降は、各国での特派員生活、地域企業の情報発信、民間からの国際関係構築、アカデミアへのメッセージなどについてお話を伺います。

1. 実験心理学からフジテレビへ

聞き手：まずご経歴をお伺いできればと思っております。早稲田大学の第一文学部から、なぜ、テレビ業界に入られたのでしょうか。

曾根：きわめて偶然が作用しまして、実は就職しようと思っていなかったんです。大学に残るつもりで、先生からもそう言われていたんですが、友人の付き添いでフジテレビを受けたら、私だけが一次から順に面接を通っていったので、教授に「先生、私はどうやら受かるかもしれません」と言ったら、「僕もテレビ出るかもしれないからいいよ」と言われてまして、それで結局大学院に行かずにフジテレビに

入ったんですね。

文学部といっても、実験心理学なんですよ。GSR (Galvanic Skin Reflex：皮膚電気反射) というウソ発見器と同じ仕組みの機械で刺激を与えて、緊張したり興奮したりすると電気抵抗が変わって、反応がオシログラフに出るんです。与える刺激によってどのような大きさの反応が、どういう波形で出るのか、たくさんデータを集めて、社会現象を表す「言葉」に対する反応を調べていたのです。言葉の意味が、お互いにどのくらい距離があるか、近いかを測定するデータを集めていたわけです。

私の先生は心理学者の相場均さんですが、慶應大学で医学博士をとった人で、社会現象に興味を持っていて、彼が与えてくれたテーマでした。ずっと先生についていけば良かったんですが、その先生に「いいよ」と言われたので、「あ、そうですか」って拍子抜けして、「じゃあ入るかもしれませんからよろしく」ってフジテレビに入っちゃったんです。

そもそも条件反射学に興味を持って、その研究をずっとしていこうと思ったんですけど、条件反射ですごく幅が広くて学問の奥行きが深いんですね。初めはパブロフという人から始まったんです。条件反射には、パブロフの頃から、一次信号系と二次信号系という二つの信号系があります。動物は、直接的な刺激に反応する一次信号系だけなんです。二次



信号系は言葉への反応で、人間だけが持っているということだ。

言葉が直接的な刺激に代わる刺激になるわけですね。例えば梅干を食べれば直接的な刺激ですばいから唾がでます。だけど、梅干のことを考えただけで、出るんですよ。これが二次信号系です。この二次信号系を調べてみようっていうのがテーマだったんです。一橋には南博さんのような社会心理学者がいて、社会心理学も少しは勉強しましたが、実際にはどちらかというと生理心理学ですね、体が反応する心理学。しかも、二次信号系の言語に対する反応を専門的に調べようと思ってですね、私の一年上の人の論文を私が手伝ったので、2年間ずっとそのテーマでやって、さらに大学院と思ってたんですね。

だから、フジテレビに入る必然性も、テレビ業界に入る必然性もなかったんです。

2. MITでコンピュータ・サイエンス

聞き手：フジテレビに入られてから45カ国ほど特派員でいらっやっています。お仕事では、どのような経験をされたのでしょうか。

曽根：大学に残って研究者になるはずの人間が、いつのまにか特派員になって経営者になっちゃったという、私も全然予測もつかなかった結果です。心理学をやっていたので、フジテレビは、私をまず人事部に入れたんです。労務、採用、教育研修、福利厚生をぐるぐるとう年半ぐらい人事部にいました。当時の部長が、東大の経済を出た工藤信男さんという方で、賃金論で分厚い本¹⁾を書くような非常に経済に明るい人で、私に、法律も経済も勉強させてくれて、大学で単位まで取らせてくれたんです。本当にいろんな分野のことをやらせてくれたので、それが次に興味を持つ土台になったんですね。それと同時に、「ちょっとアメリカに行ってコンピュータを勉強してこい」って言われまして、IBMの研修を受けてからミシガン大学にいきました。今でもやっていると思いますけど、コンピュータを使ったCAI、コンピュータ・アシステッド・インストラクションがまさに盛んになり始めた頃で、その研究をして、何かフジテレビの事業として役立つことがあれば見つけてこいというテーマを与えられたんで

す。

聞き手：最近ではCAIという言い方はせず、e-learningと言いますが、やっていますね。

曽根：私が開局5年目入社で、当時は、一期生から2〜3人ずつアメリカに1年間留学させる制度がありました。それでミシガン大学でCAIの仕組みを勉強したんです。単位を取ることが目的じゃないんですが、在籍するからにはちゃんと勉強しないと格好がつかみませんので、単位を取りましてね。その間に、併願していたMITに相場先生の推薦状を送ってあったんですが、後から受け入れられたのでMITに移ったんです。MITで認知心理学とコンピューターサイエンスの科目を受けて、極めて優秀な人たちと一緒に机を並べて単位を取りました。こんなに優秀な頭脳がいるんだっていうのをね、実感しましたよ。MITの教授が「本当に君は大したもんだ (You are something)」っていう学生が何人もいるわけですよ。その学生の答えを理解するのに1週間くらいかかるっていうね、問題をスパッと解くような人がいるわけですよ。いろいろ刺激を受けました。

聞き手：最先端のコンピュータ・サイエンスの環境にいらっやった当時、その後の日本でのコンピュータの活用を考える際にヒントになったことはありましたか？

曽根：まさにアメリカでは、スタンフォード大学や、イリノイ州立大学でCAIが実用化されていたから、それをテレビ局のビジネスとしてどうやって取り込んでいいのかなということを考えました。実際には帰国してから、通産省と郵政省、今の経済産業省と総務省ですね、その二つの省が仲悪かったんですけど、そのときは珍しく一緒になって映像情報システムの開発を国家プロジェクトでやろうということになったんです。ハードウェアはメーカーが作るんですが、プログラミングとか、あるいは、中身のソフト (コンテンツ) として供給するいろんな番組的なものをフジテレビが中心になって、テレビ局ではうちだけだと思いますけどね、一緒になってやったんですよ。多摩ニュータウンに約500戸、奈良の東生駒に約200戸の実験タウンを作りました。それが今、ケーブルテレビでやっている双方向サービスそのものです。実際に実験を始めたのが1975年ぐらいですかね。私は73年から74年ま

で1年ちょっと、コンテンツを作る作業に加わって
いました。あの頃の放送は送りっぱなしだったんだ
けど、双方向が大事だということが注目されました
ね。これには学んできたことが大いに役に立ちまし
た。

3. 技術から報道へ

曽根：私は生涯、1回だけ「これをやらせてくれ」
と言ったことがあって、「報道やらせてくれ」と。
つまりいろんなこと勉強した結果、やっぱり報道が
一番面白いなと思って、それまでの道筋だと、どう
も報道からは離れていくようだなど。

聞き手：技術系にいたということですね。

曽根：実際、技術開発室という部署にいまして、
このままでは本領を発揮できないような気がしまし
てね。それで報道に行かせてくれと言いつけていた
ら異動になりました。忘れもしない1975年の4月
1日。ほかの人の異動がなかったのか少しずらした
のか、私だけ一人ぼつんと報道に異動したんです。
「そんなに行きたいなら行けっ」という感じで(笑)。
報道というところはその前の経歴なんて一切無視す
る職場で、当時は特に徒弟制度的で、ゼロから、ス
タジオのカメラの下へもぐって、残り何秒とか札を
だしたり、先輩が送ってくる原稿を一生懸命電話で
取るところから始まって、それが2年ぐらい続きま
した。その後、英語勉強してきたんだから外信部
に行けと言われ、外信部に行ったら、当時はハイ
ジャックの連続で、日本赤軍が大活躍していた時代
ですからね。

聞き手：2日くらい連続放送していたんですよ
ね。今でも最長記録だそうです。

曽根：そうですね。ハイジャックか浅間山荘か、
というぐらいすごくて、大きな事件が今より頻繁に
あったんですね。

そのうちに、当時、俵孝太郎さんという硬派の
キャスターがいます。俵さんの夜のニュース番組
の編集長をやられて、毎晩番組が終わると一緒に
帰ったものです。怖い感じの人でしたけど、だんだ
ん慣れてくるとね、非常に人間味があって良い方
だったんですよ。

4. モスクワ特派員生活

曽根：編集長をやっていたら、モスクワに行っ
てくれと言われ、少人数で1年間ロシア語を教わっ
て、モスクワ特派員になりました。赴任が82年の
2月で、82年の11月に18年間政権を続けてきた
ブレジネフが亡くなったんですね。それまではあま
りニュースがなかったものですから、私の前の特派
員達は暇でしたが、私が行ったら8カ月ぐらいで亡
くなって、それからがまさに激動の時代だったわけ
です。

後継者のアンドロポフが病気がちで1年で亡くな
り、その次のチェルネンコもまた肺気腫でやはり
1年2〜3カ月で亡くなったんですよ。

それで1985年の3月にゴルバチョフが出てきた
わけです。ゴルバチョフが初めてレーニン廟のと
ころにずしずと登壇するとき、お立ち台みたいな
ものがあって幹部がずらっと並ぶんです。就任して初
めてのセレモニーで公開の場に現れたのが1985年
の4月かな。そのとき初めて、レーニン廟の横で、
割合近いところでゴルバチョフを見たんですよ。そ
れまではレーニン廟に記者なんか招き入れてくれな
かったから。朝日がちょうど向こうから上がってき
て、いかにも新しい時代が始まるなっていう感じで
したね。

私は娘を連れて行ったんですよ。娘が中学卒業し
たばかりで都立高校も決まっていたんですが、私の
赴任から2カ月遅れの4月からモスクワに家内と一
緒に来ることになり、彼女は飛行機の中で初めてロ
シア語のアルファベットを練習して、一貫教育の
10年制の学校に、本来の学年より一つ下の7年生
の終わりに入れたんですが、さすがに難しく、結
局、最初の学期の4月から6月は数学と体育しか点
数がつかなかったですね。ところが、夏休みになる



とピオネールというキャンプがあって、英語でいうと pioneer です。両側に2段ベッドがある4人部屋で、1カ月して帰ってきたらペラペラでしたね。15歳の頭ってというのは柔軟ですね。

この学校に通い始めるときが大変で。私が校長に相談にいったんですが「ロシア語を全く知らないけど入れてくれ」と言ったら「ダメだ、アルファベットも知らないような子が勉強についていけないはずがない」とダメの一点張りでした。ところが「マユリは英語も得意だったから」といったときに「Mayuri? 俺の名字はマヨローフだ。うーん、似てるな。じゃ、明日から来い」となって。「この国は面白い国だな」と。

それで入った結果、9月以降は卒業するまで、成績は3以下は取らずに4か5だけで、外国人なのに凄いということで表彰されました。

高校に相当する学年に軍事教練があるんですよ、カラシニコフ（自動小銃）をばらして組み立てるんですね。その競争があって、うちに帰ってきては練習してましたよ。それでだんだん勝ち残ってですね、女の子のトップになって、最後に男の子のトップと対決して、優勝したわけですよ。そしたらね、教練の先生が「君たちは資本主義に負けてはいけない」と言っそうです（笑）。そういうことでうちの娘を見ていたのです。だから娘はひしひしと日本人であるということを、強く感じていたみたいだね、それは非常に良かったと思いますね。

5. 国際人を育てるには

聞き手: 経営情報学会では国際学会発表に奨励金を出しています。曾根さんは海外経験を重視されていますが、若手を育成する立場として若手を海外に向かせるにはどうしたら良いと思われますか。

曾根: 若手も海外に行きたいという気持ちは持っていますね。ただ「大学に留学したい」ではないと思います。私がフジテレビにいたときに、一つ事業を始めました。ロサンゼルスユニバーサルスタジオに、大学と提携して2週間か3週間留学させるんです。1998年に始めて今でも続いています。それはみんな行きたがるんですよ。ユニバーサルの制作スタジオを見て、大学教授の講演を受けると同時に、現場を見させてもらって帰ってくるので、す

ごくいい勉強になるんですね。向こうのテレビ界の現状を知ることができるのと、これからの学問的な展望を学んでくるので、すごくいいんです。私が国際局長のときに始めたんですけど、留学というよりも、楽しく経験をしてもらえるようなものを、プログラム化すると良いと思います。本人に何かやってこいというとなかなか難しいから、何か定まった仕組みを作るということですね。

それには企業側の育てようという努力が必要ですね。それに行きたいと思うようなプログラムを創るということ。とりあえず大学入って修士博士取ってこいと言ったって、大変ですね。短期で見学を兼ねて一応勉強もやれるようなものを、取り混ぜてやるのがいいと思うんですよ。

6. 海外経験で得たこと

聞き手: 海外でのご経験がご自身にとってはどういうふうに関与したとお考えですか？

曾根: やはり文化の違いというか、あらゆる民族の、かなり異質な国に行って実際に仕事をしてきたので、本当にそれぞれの民族の考え方がわかったことですね。国際情勢をみる見方が養われたといえますかね。

私の場合はモスクワから始まったので、特に東欧諸国ですね。当時は東欧は閉鎖されていてあまり良く見えていなかった地域で、東ドイツから始めて、チェコスロバキア、ポーランド、ルーマニア、ブルガリアといった国々を全部周りました。各国の歴史や文化、民族性を見ながら、勉強しないとレポートもできないので、その都度勉強もしたし、それらを理解することによって、国際情勢をみる力がつきました。どうしてそういう行動にでるのか、ということがわかるようになりました。

今、ロシアがクリミアを占領していることも、もともとロシア人から考えればロシアの領土だったという思いがあるのでしょう。本当はロシアとウクライナは一体の物なんですけどね、というのはスラブ人の国なんです。ポーランドやチェコスロバキア、今はチェコとスロバキアですが、ブルガリアもみんな同じスラブ民族なんです。特にその中でも白ロシアとロシアはほとんど同じ。ただし、白ロシアは極めて貧しい。ウクライナは穀倉地帯が豊かで

すが、要するに民族は同じなんです。その中で歴史的にいろいろあって、ウクライナはポーランドに占領されていた時代もあるんです。ポーランド人からするとウクライナは自分たちの国だったという思いがあって、あれはロシアじゃないと。ポーランドだってスラブ人なんですけど、ポーランドは西ヨーロッパの影響を大きく受けていて、ショパンが生まれたように、ロシアの感覚とはかなり違うんですね。チェコスロバキアもそうですけど。やはり中欧の文化があって、実際に仕事をすることによってわかることがある。

聞き手：旅行者じゃだめなんですね。

曾根：必ずしも自分が得た知見にふさわしい仕事をさせてもらえない、世の中かなりそういうことが多いと思うんです。あんなこと自分だったらもっとわかっているのに、ということ、わからない人がやっているケースが非常に多いんです。外交官の中でも特定の国に特に詳しい人が使われないで、そもそもよくわからない人がやることが多いと、経験を持つ人をスポットでも、もっと上手く使えたらと思います。人材バンクというか、人材のデータをもっと精密に使いこなしていけば、外交に限らずいろんな

分野で、人材が活かせるんじゃないかなと思います。

(次号に続く)

注

- 1) 工藤信男『賃金管理と昇給制度—その理論と実際』東洋経済新報社、1958年。

略歴

曾根 正弘 (そね まさひろ)

1964年早稲田大学第一文学部(哲学科心理学)卒業、(株)フジテレビジョン入社、1970-1971年米国ミシガン大学、MIT留学、1982-1985年モスクワ特派員、1989-1990年ワシントン、ニューヨーク特派員、1990-1994年ロンドン特派員・支社長、1996-1998年取締役総合調整局長、国際局長。1998年(株)テレビ静岡専務取締役、2005年代表取締役社長、2009年代表取締役会長、2011年相談役(現在に至る)。

現在の主な兼職：静岡市行財政改革推進審議会会長、静岡県ニュービジネス協議会副会長、静岡商工会議所情報文化部会長、静岡交響楽団理事長。